

『神に従うこと』 ヤコブの手紙 4 章 7～10 節

本日は、この神に従うことについて三つのこと学びます。

1. 神に従いなさい

第一に 7 節に「**ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。**」とあります。「**ですから**」というのは、ヤコブがこれまで語ってきたことを受けてということです。6 節には、「**神は、さらに**」とあります。私たちはすぐに神ではなく世を愛してしまうような愚かな者であるにもかかわらず、しかし、神は、そのような者をも愛して恵みを注いでくださいます。ですから、そのように神の恵みによって救われたキリスト者はどうしなければならないのでしょうか。「**ですから、神に従い**」なさいということです。この手紙はユダヤ人キリスト者に宛てて書かれた手紙です。ユダヤ人キリスト者とは、もともとユダヤ人であった彼らが、神の恵みを受けてキリスト者になった人たちのことです。ユダヤ人というのは、旧約聖書を信じていますが、その中に書かれてある約束のメシアがイエス・キリストであるとなかなか受け入れることができない人たちです。しかし、そんな彼らでも、中にはイエスを信じて救われた人たちがいました。それがユダヤ人キリスト者です。

そんなユダヤ人キリスト者にとって、神に従うことは、すべての祝福の原点でした。彼らの先祖は昔エジプトで四百年の間、奴隷として捕らえられていました。しかし、神はモーセという人物を立てて、彼らをエジプトの地から救い出してくださいました。しかし、彼らがカデシュ・バルネアというところまで来たとき、約束の地まではほんの目と鼻の先というところまで来たのに、「上って行け」という神の言葉に従わないでその地の住人を恐れ、上って行きませんでした。その結果、彼らは 40 年間も荒野をさまようことになってしまったのです。そして、多くの人たちが荒野で滅び、約束の地に入ることができませんでした。

いったい何が問題だったのでしょうか。神に従わなかったことです。ですから、約束の地に入ろうとしていたユダヤ人に、モーセが繰り返し、繰り返し語ったことは、神に従いなさい、神を愛しなさいということだったのです。神に従うことが、その地で彼らが幸せに生きるための絶対条件であり、神が約束してくださったすべての祝福を受ける道であったのです。

ヤコブはここで、イエスを信じて救われたキリスト者に対して「**神に従いなさい**」と命じました。「**神に従う**」ことが、神の恵みを受ける道であり、この世で彼らがすべての祝福にあずかる条件なのです。しかし、残念ながら、生まれながらの人間は、「**神に従う**」ことができません。生まれながらの人間は肉の性質を持っているので、神に従いたくないからです。肉の性質というのは、自分中心という性質のことです。人はみな生まれながらに自己中心であって、いつも自分を中心に考え、自分の利益を求め、自分の欲望を満足させたいという傾向があるのです。ですから、神に従うよりも自分の思いを通したいのです。しかし、神に救われた者は、自分に死に、神のために生きるようになりました。自分ではなく、神のために、神を愛し、神の栄光のために生きるようになったのです。

それでは、神のために生きるとはどういうことでしょうか。「**神を愛する**」とはどういうことなのでしょう。それは、神に従うということです。ヨハネ第一 5 章 3 節には、「**神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。**」とあります。ここには、「**神を愛する**」とはどういうことなのかがはっきりと示されています。それは、「**神の命令**」を守ることです。「**神を愛する**」愛している人は、「**神の命令**」を守ります。それは重荷とはなりません。神を愛していると言いながら、神の命令に従いたくないということはないのです。

また、イエス様はヨハネの福音書 14 章 15 節で「**もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。**」と言われました。イエス様を愛する者はイエス様の命令、イエス様の「**戒め**」を守ります。では、その「**戒め**」とは何でしょうか。ヨハネの福音書 13 章 34 節に「**わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」とあります。それは互いに愛し合うことです。これがイエス様の「**戒め**」です。

それなのに戦いや争いがあるのはどうしてでしょうか。それは、神に従っているのではなく、自分の欲望に従っ

ているからです。何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、すぐに人殺しをするのです。自分の思うようにならないと、すぐに敵対心を持ち、憎んだり、争ったりするのです。あなたがたの肉が問題だと、ヤコブは言っているのです。

しかし、神を愛する者は、神に従います。自分の思う通りにいかなくても、自分の欲しいものが手に入らなくても卑屈になりません。神の命令に従って、人を愛し、人を赦し、人を受け入れます。コリント第一 13 章 4～7 節に「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。」とあります。箴言 10 章 12 節には「憎しみは争いを引き起こし、愛はすべての背きをおおう。」とあります。

ところで、ここには「神に従いなさい」ということだけでなく、「悪魔に対抗しなさい。」ともあります。「そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」ということでしょうか。「神に従う」ことを悪魔が妨げているということです。ですから、神に従って、そして悪魔に立ち向かわなければなりません。

悪魔とは何者でしょうか。イザヤ書 14 章 12～15 節に「明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。おまえは心の中で言った、『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』だが、おまえはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」とあります。悪魔は元々神に仕える天使長でしたが、彼は高ぶって、自分も神のようになりたいと神に反逆し、天から落とされよみの穴の底に落とされました。そして最初の人アダムとエバはその悪魔にだまされ罪を犯したので、神から離れてしまいました。それ以来、人類はずっとこの罪の支配下に置かれるようになりました。ですから、人間は生まれながら罪の奴隷なのであって、いつでも罪に従うというか、悪魔に誘惑されて罪を犯してしまうのです。

しかし、神は、ひとり子イエス・キリストをこの世に送り、私たちの罪の代わりに十字架につけてくださり、その罪から救ってくださいました。罪の奴隷から解放して下さったのです。キリストを信じた人は悪魔の支配から神の支配に、暗やみから光へ移されたのです。ですから、キリスト者は「神に従う」ことができるようになったのです。

しかし、以前の主人であった悪魔は、キリスト者が新しい主人である神に従うことを憎み、神に従わないようにあの手この手を尽くして誘惑し、以前の罪の生活に引き戻そうと躍起になっているのです。例えば、悪魔は私たちのさまざまな欲に働きかけて誘惑します。目の欲、肉の欲、暮らし向きの自慢などはそうです。誘惑そのものは罪ではありませんが、誘惑に負けると罪になります。悪魔は、私たちが神に従わないようにと、あの手この手をもって誘惑してきます。ですから、私たちはこの悪魔に立ち向かっていかなければなりません。そのためには、「神に従う」ことが求められます。私たちの力では、悪魔に立ち向かうことができません。「神に従い」、神の力をいただき、そして悪魔に立ち向かわなければなりません。

神はそのために神の武具を与えてくださいました。それはエペソ 6 章にあります。中でも悪魔に立ち向かっていくために、御霊の与えてくださる剣である神のことばを与えてくださいました。神のことばは、御霊の与える剣です。この剣を持って悪魔に立ち向かっていくなら、悪魔は逃げ去るのです。あなたは、この武具を受け取っておられるでしょうか。私たちは強そうでも弱い者です。すぐに否定的になったり、つまづいたりします。ですから、この神の御言葉を心にたくわえ、御言葉によって強められて、悪魔に立ち向かっていかなければなりません。

2. 神に近づきなさい

第二のことは、「神に近づきなさい」ということです。8 節に「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。」とあります。神の恵みによって救われた者は、神に近づかなければなりません。そうすれば、神はあなたに近づいてくださいます。ど

ういことでしょうか。それは、神との親しい交わり中に入れられるということです。悪魔はさまざまな方法で誘惑してくると申し上げましたが、その誘惑に負けて罪を犯すと、神から遠く離れてしまいます。神から離れるとこの世に妥協し、自分勝手な生き方に逆戻りしてしまいます。

あの放蕩息子のことを思い出してください。彼は父親に財産を分けてもらおうと、遠い国に旅立ち、そこで放蕩して湯水のように財産を使い果たしてしまいました。彼は食べるにも困り果ててしまいました。それである人のところに身を寄せると、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせました。彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどでした。それは彼にとって屈辱的で、最悪な状態でした。父親のところにいればそんなことはなかったのに、そんな父の下を離れ、自分勝手に生きようとした結果がこうでした。これは私たち人間の姿を表しています。神から離れた人間は、この放蕩息子のようにみじめでしかないのです。人間にとってもっとも幸せなのは、神と共にいることです。なぜなら、人間はそうように造られているからです。

あの放蕩息子は、最悪の状態に落ちたとき、そのことを思い出しました。そのとき、彼は「父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。」（ルカ 15:17） そうだ、父のところに帰ろう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」（ルカ 15:18～19）これは彼にとって大きな方向転換でした。これまで自分に向かっていた方向を、父に向けました。これを悔い改めると言います。彼はへりくだり、悔い改めて、父のもとに向かいました。するとどうでしょう。家まではまだ遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思って走り寄り、何度も口づけして、喜んで彼を迎え入れました。そして彼に一番良い着物を持って来て着させ、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせ、肥えた子牛をひいてきてほふり、祝ったのです。父親から離れ、自分勝手に生きていた彼には何の喜びも祝福もありませんでした。しかし、彼が向きを変えて父のもとに立ち返った時、父親は彼に近づいてくれました。神に近づくなら、神はあなたに近づいてくださるのです。神はあなたの罪を赦し、あなたを祝福してくださいます。ですから、まだイエス様を信じていない人がいたら、どうか悔い改めて、神に立ち返ってください。そうすれば、神はあなたに近づいてくださいます。あなたのすべて罪は赦されるのです。イザヤ書 1 章 18～19 節に「…たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようにになる。あなたがたは、もし喜んで聞こうとするなら、この地の良い物を食べることができる。」とあるように、あなたの罪の全部を赦してくださいます。

また、もうイエス様を信じたのに罪を犯し、神から離れておられる方がおられるでしょうか。そういう方がおられましたら、どうか主のもとに立ち返ってください。神に近づいてください。そうすれば、神はあなたに近づいてくださいます。

ところで、ここには「手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。」ともあります。どういうことでしょうか。旧約聖書によると、神に近づくことができたのは、神に仕えた祭司だけでした。彼らはきよめの儀式に従って手を洗い、動物のいけにえをささげてからでないと、神に近づくことができませんでした。なぜなら、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないからです。ですから、動物をささげて、動物の血を取り、その血によって身をきよめてから、神に近づいたのです。これは、やがてもたらされる完全ないけにえ、イエス・キリストの十字架の贖いのひな型でした。

しかし、ここでヤコブが「手をきよめなさい」と言っているのはそのことを言っているのではなく、イエス様を信じた後に行っている罪の行いのことです。この手紙は、ユダヤ人キリスト者に宛てて書かれました。彼らは悔い改めてキリストを信じていたのです。それなのに、彼らの行いは神の御心にかなったものではありませんでした。行いが伴った信仰ではなかったのです。私たちは、イエス様を信じてからも罪を犯します。罪を犯さずには生きていけないと言ってもいいでしょう。ここでは、そうした罪を悔い改めるようにとされているのです。その場合この「手」は、私たちの行いを表しています。キリストを信じて救われた者であるなら、そこには当然良い行いが伴うはずなのにそうでないなら、それを洗いきよめなければなりません。

また、ここには「**心を清めなさい**」ともあります。心を清くするとは内側を清くすることです。私たちの思い、私たちの動機、私たちの考えといった内側をきよめなければなりません。すなわち、キリストを信じて罪がきよめられ、「**神に近づく**」者とされた私たちは、神の御心になかった心と行いを持つように、絶えずきよめられなければならないということです。それによって、「**神に近づく**」ことができるからです。

3. 神の御前にへりくだりなさい

第三のことは、「**主の御前でへりくだりなさい**」ということです。9～10 節に「**嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。**」とあります。これは、どういう意味でしょうか。ヤコブの教えは、イエス様の教え、特に山上の説教がベースになっています。イエス様は「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。**」(マタイ 5:3～4)と言われました。イエス様はここで、「**心の貧しい者は幸いです**」と言われました。「**心の貧しい者**」とはどういう人でしょうか。それは、神の前に心がへりくだった人です。自分はどのような罪人であり、自分では自分を救うことができないと認めている人、つまり霊的破産状態にあると認めている人です。そのような人は幸いです。なぜなら、「**天の御国はその人たちのものだからです。**」そのような人こそ神から恵みを受けるのです。

イエス様は、ルカの福音書 18 章で、祈るために宮に上ったパリサイ人と取税人の話をされました。パリサイ人は、立って、心の中で「**パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』**」(ルカ 18:11～12)と祈りをしました。それに対して、取税人はどのように祈ったのでしょうか。彼は遠く離れて立ち、目を天に向けてようとせず、自分の胸をたたいて「**神様、罪人の私をあわれんでください。**」(ルカ 18:13)と言いました。いったい、このふたりのうちどちらが、義と認められて家に帰って行ったのでしょうか。14 節に「**あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。**」とイエス様は言われました。「**心の貧しい者**」とは、このように自分の罪を悲しみ、嘆き、神の前にへりくだって、神に救いを求める人です。ですから、ヤコブはここですが、あなたがたは「**嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。**」と言っているのは、自分の罪を悲しみ、神の前に心が砕かれて、神に赦しと救いを求めるようにということだったのです。

ダビデは偉大な王でしたが、彼の最も偉大だったのは、神の前にへりくだることができたという点です。彼はウリヤの妻バデ・シェバと姦淫を行ったとき、神の前に出て詩篇 32 篇 1～5 節で「**幸いなことよその背きを赦され罪をおおわれた人は。幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。私が黙っていたとき私の骨は疲れきり私は一日中うめきました。昼も夜も御手が私の上に重くのしかかり骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。セー 私は自分の罪をあなたに知らせ自分の咎を隠しませんでした。私は言いました。「私の背きを【主】に告白しよう」と。するとあなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。」と祈りました。彼は偉大なイスラエルの王という立場にあっても、主の前にへりくだり、自分の罪を告白して、赦しを請いました。それゆえ、主は彼の咎を赦し、彼を本当の意味で偉大な王としました。なぜなら、「**だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。**」あなたはダビデのように主の前にへりくだっているでしょうか。**

ですから、もし本当に何事かをよくしたい、何事かを変えたいと思うのなら、**神に近づく**ことです。我欲に満ちた心を、神のきよい心に合わせるようにしていくことです。

「**神に従いなさい**」「**神に近づきなさい**」「**主の前でへりくだりなさい**」これが**神**の恵みを受けたキリスト者の姿です。私たちはいつもこのことを忘れることなく、ただへりくだって神の御心に歩ませていただきたいと願います。